

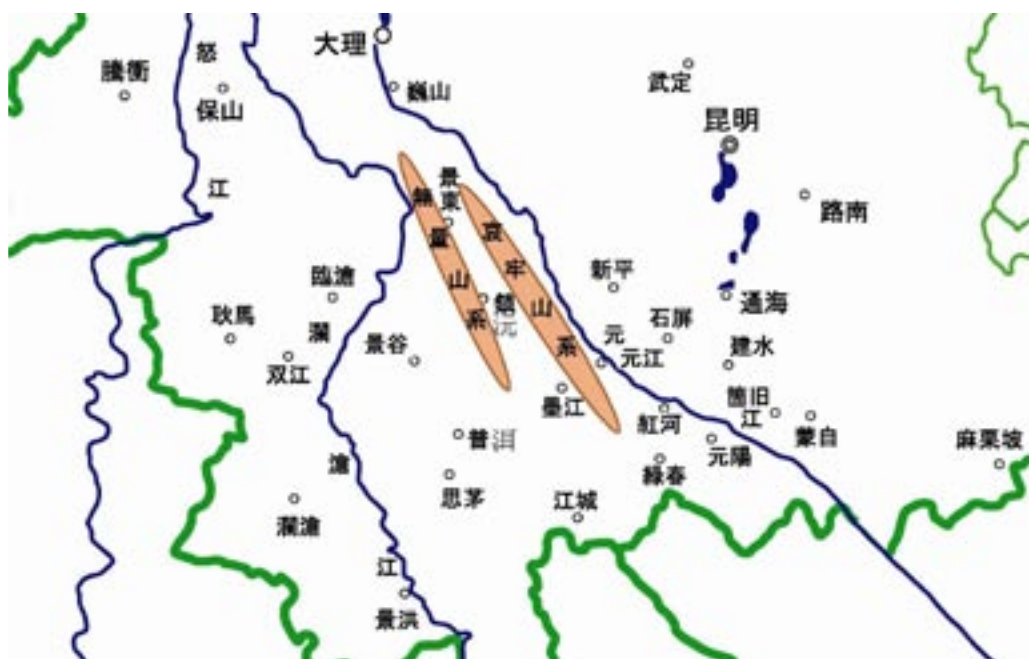
ダニエルズ歴史班全体報告

班全体の報告
クリスチャン・ダニエルズ

1. 研究の目的・フレームワーク

「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」プロジェクト全体としては、生態史モデルの構築が目的として設定されているが、本班は雲南の一地域の事例研究から構築したモデルを提示することによって、プロジェクト全体のモデル構築に貢献することを最終目的としている。当班は、主に歴史史（資）料に基づいて、400年という時間軸で一地域の生態がどのように変化してきたかを解明することによって、事例のモデルを構築する作業を行なっている。

事例研究の対象として、雲南の元江以南の地域を選択した。この地域は、東は紅河から、玉溪地区、思茅地区を経て、西は大理地区の巍山県まで延びている（地図を参照されたい）。



これを選択した理由としては、(1) 人文地理的要素からみて、ここは本プロジェクトの別の班が対象にしている雲南のシブソンパンナー、及びラオス北部と連続している亜熱帯地域で、民族の居住方式と地形において類似性がある、(2) 歴史史（資）料が残っており、16世紀から20世紀までの400年にわたる歴史変遷を明らかにできる、(3) 蓋然性の高い仮説として、この地域には漢族移民の入植によって商品経済が持ち込まれ、生態環境が著しく変化したことが想定される、などの利点が挙げられる。しかし、これまで当該地域の生態環境が具体的にどのような要因によって変化してきたかという点は実証されていないが、その変化の過程を解明することによって、生態史モデルが構築できると考えられる。以上の三点を考慮すれば、この事例研究によって構築される生態史モデルは、プロジェクト全体のモデル構築に寄与できると考えられる。

本班は、生態環境史が以下三つの側面から構成されているという前提で作業を実施している。

- [1] 人口の歴史（自然災害や疫病などを含む）
- [2] 開発の歴史（人間移動、商品経済の進入、交易、国家政策、漢族移民による土地開発、栽培面積の変遷、寺院建立などの要因）
- [3] 自然認識の歴史（人間の自然観が変われば、野生動物や植物に関する人間の対応も変化する）

生態史モデルを構築するために、本プロジェクト実施の最初の三年間において、史料収集・分析を重点においている。[1] 人口の歴史や [2] 開発の歴史に分類された栽培面積に関するデータは、16世紀から20世紀の間に刊行された地方志などの書籍に掲載されている。この書籍は人口や栽培面積の変遷に大きな影響を及ぼした自

然災害や疫病に関する資料をも含んでいるので、この収集・分析はとても重要な作業である。

[2] 開発の歴史と [3] 自然認識の歴史に基づく生態史モデルの構築は、開発の歴史の具体的な過程の解明によって完成し得ると考えられる。各地に残る碑文は、漢族移民がどのように当該地域を開発したのかを伝える重要な史料である。これまでこの地域に残る碑文は、簡単な記録はされてはいるものの、本格的な収集・研究はされていない。なおかつ、これらの碑文資料は現在の経済発展に伴う開発の進む状況下で消滅しつつあり、目下その収集・保存が急務となっている。これらの碑文の分析を通じて、国家政策と漢族移民の関係、土地開発と商業生産の導入、人間が自然災害や森林保護に対してどのような措置を採用したかを実証できると考えられる。そのため、本プロジェクト実施の最初の三年間において、本班は毎年現地へ赴いて碑文の調査を実施し史料を収集することにしている。

碑文がなぜ生態史モデルの構築に重要であるかということに関しては、以下の二点が挙げられる。(1) 碑文は原史料として価値が高い。書籍は歴史事件が発生したのちに執筆され、編集される過程の中で改竄が行なわれることが少なくないため、当初と異なる事実を伝える場合があるが、碑文は立てられた当時の記録をそのまま記している。(2) 碑文は書籍に記されていない開発に関わる事実を多く記録している。特に、漢族移民と現地の非漢族の関係、商人の活動、住民による自然保護などについてより具体的な情報が得られる。

碑文はこのように重要な史料となっているが、それを収集する手法として、本班は(1) 拓本の採取、(2) デジタルカメラによる撮影、(3) スチールフィルムによる撮影、及び(4) 現地での抄録という四つの方法を用いている。碑文の保存状態が悪い場合が多く、日本に戻ってから正確に碑文を入力するためにはこの四つの方法が必要不可欠である。さらに石碑自体のデータの収集のため、実測及びGPSによる位置測定を実施している。これは手間がかかる作業であるが、その作業を効率よく実施するためには、6人の班員からなる集団によって執り行なわなければならない。

2. 平成15年度の成果

平成15年度においては、本班は[1] 人口の歴史に関するデータ入力と栽培面積関係数量データの入力、及び[2] 開発の歴史と[3] 自然認識の歴史に関する碑文の収集に専念した。以下、それぞれについて簡単に報告する。

[1] 人口の歴史に関するデータ入力について。地方志に掲載される人口の数量データを選び出して入力したが、そのデータはいずれも原本から採取した。20世紀に印刷された版本には、誤植などテキストに異同がありデータが不正確の場合があるため、原本を使用する必要がある。したがって、日本の大学や研究機関に所蔵されている地方志の原本をテキストとして使用している。現在までに、16世紀から19世紀の間に刊行された12部の地方志の入力が完成している。このデータの研究の状況については、野本の個人別報告を参照されたい。

[2] 開発の歴史と[3] 自然認識の歴史のための碑文調査。本年度において本班は二回にわたり拓本採取調査を実施した。第一回目は、2003年8月25日から同年9月22日まで大理地区の巍山県において、第二回目は、2003年11月24日から同年12月23日まで思茅地区と大理地区の巍山県においてそれぞれ実施した。成果として今年度では碑文数計129件を調査し、拓本数合計85点を採取した。但し、第二回目の調査では、雲南大学との協定がまだ締結されていなかったため、採取した資料の一部(拓本18枚、フィルム1本、デジタルカメラのコンパクトフラッシュ3本及び碑文18枚分の抄録)を日本に持ち帰ることができなかった(個人別報告に未将来資料と称することにする)。ダニエルスの個人別報告で紹介するように、未将来資料の中には18世紀末・19世紀の当該地域の住民が採用した森林保護の措置を伝える碑文が含まれている。また、第二回目の調査で収集した碑文の中には、漢族商人の進出及び地域社会の漢化過程を明示する資料があり、それぞれについては増田と西川の個人別報告を参照されたい。

巍山県において、質量ともにまとまった寺院・道観関係碑文が収集できた。当初、巍山県は予備調査地と位置づけていたに過ぎなかったため、これは予想外の収穫であり、将来研究編をつけた史料集が刊行できると考えている。寺院・道観の建立は、漢族式の定着農業と商業活動の増大を示す指標であるから、その関係の碑文は重要な史料である。寺院・道観を建立・運営する社会は生態環境に変化を来たす行為を行っており、寺院・道観の開発の内容が寺院・道観関係の史料に反映されているからである。16世紀～18世紀の仏教・道教史の中に、収

集碑文がどのように位置づけられるかについては、立石の個人別報告を参照されたい。拓本採取の訓練として巍山県での予備調査はとても重要であった。雲南における碑文の保存条件は日本国内と大きく異なっており、採取作業が困難をともなう場合が多く、工夫を凝らす必要がある。経験を蓄積し、効率よく碑文を採取する手法を編み出すために、雨季でも作業が可能な巍山県の寺院・道観を選択して、訓練を兼ねた予備調査を実施した。巍山県での予備調査の概要と拓本採取の技術的な側面については、清水の個人別報告を参照されたい。